

## 花まつり

平成29年4月第1週放送

四月八日ようかに、お釈迦さましゃかのお誕生を祝う行事を「花まつり」と言います。

この様に呼ばれるようになったのは意外と新しく、明治期以降のようです。それまでは、“降誕会”ごうたんえ、“灌仏会”かんぶつえ、“浴仏会”よくぶつえ、“仏生会”ぶつしょうえ、“花会式”はなえしきなど、さまざまに呼ばれてきました。

また、誕生された日やその年についてもさまざまな説がありますが、お釈迦さまご生誕の場所はほぼ特定されています。現在のネパールにあるルンビニ園と呼ばれる場所です。

この地では、紀元前三世紀半ばに仏教を篤く信仰したアショーカ王あつが建てた石柱の碑文ひぶんや、誕生の場所を示したマーカーストーンも発見されています。現在は施設も整い、お釈迦さまのお母さまの名前かんを冠した“マヤー堂”も建て替えられ、赤い花をつける無憂樹むゆうじゆのもとで出産される姿を象かたどったレリーフや誕生仏たんじょうぶつ、また産湯うぶゆを浴びたとされる沐浴もくよくの池も見ることができます。

伝説によればお釈迦さまは、マヤー夫人が無憂樹に手をかけた時わき脇の下から生まれ、お釈迦さまが誕生するや天の神々がたくさんの花を散らし、竜王かんろは甘露の雨を降らせたとされています。この様子が、現在「花まつり」で見る“花御堂”はなみどうや甘茶を誕生仏にかけるといふ習慣の原型になっているのでしょう。

この伝説だけを見るとお祝いの情じょうけい景ばかりが目につきますが、お釈迦さまを産んだマヤー夫人は、出産後一週間程で亡くなったと伝えられています。

一人の女性が命がけで産んだ男の子は、生誕の地はに生えていた無憂樹の名に逆らうように憂うれいに満ちた青年期を過ごし、やがて出家をして修行者としての道を歩みだすのです。

「花まつり」の際は、満開の花々に囲まれた幼きお釈迦さまの仏像がまつられませんが、そこには最愛の母の命がけの出産とその後の釈尊しゃくそんと呼ばれるまでの紆余曲折うよきよくせつの人生も隠されていることを忘れてはならないと思います。

私たちは、人生の初めから終着点に至るまで、さまざまな場面でさまざまな花々と出会います。花にはつぼみの時もあれば、満開の時もあり、いずれ散りゆく時を迎えます。人が花ひに惹かれるのは、そこに自みすからの人生を重ね合わせるからなのかもしれません。

また、この世に生を受けるといふことは、その後<sup>に</sup>やって来る自らの人生を引き

## 『禅のこころ-曹洞宗-』

---

受けるということでもあります。そこに何が待ち受けているかはわかりません。

一人の人間として生まれ、悩まれたお釈迦さまが説かれた教えは、自らの内なる  
御<sup>みほとけ</sup> 仏の姿に気付き、それを大切にしながら人生を渡っていくことを勧める教えです。  
この花まつりに際して私たちが目を向ける先は、自らの内に宿る御<sup>ぶつしょう</sup> 仏の心、仏性  
という花でありたいものです。

— 終 —